〔実践・事例報告〕

教育・保育課程論の授業方法を考える
ー学生の振り返りをもとにー

徳永良枝
（宇部フロンティア大学短期大学部保育学科）

“A trial for the improvement on curriculum theory”
- Based on the analysis of students’ reflection -

Yoshie Tokunaga
(Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

保育現場を知らない学生にとって「教育・保育課程論」という授業は，ネーミング自体なじみが薄く，初めから難しそうと抵抗を示す．保育内容の教科との関連も大きく，さらに実習で保育をするにあたって，この教科を理解しておくことは必要不可欠である．

難しそうというイメージをなくし，興味・関心を高めながら主体的に授業に参加してもらうためには，指導の工夫が必要である．授業後の学生による振り返りから，より理解度を高めるための授業方法を考える．

キーワード：授業，指導方法，工夫，振り返り

1. はじめに

教育・保育課程論という授業は，学生には難しいというイメージを持たれている．保育者を目指す学生にとって，授業で学ぶ内容はすぐにでも保育現場で役立つものを期待している．折り紙を使った製作や体を動かす運動遊び，ピアノを弾きながら歌ったり踊ったりというアクティブなものへの興味・関心が高い．確かに実習で子どもの前に立てば，それらの遊びが即，役に立つ．そのため保育内容に関する演習系の授業には積極的に出席するものの，講義中心で保育の基本を学ぶ授業に対しては消極的であり，免許取得のための単位に必要だからという考えが大きい．

そこで，学生が主体的に授業に参加し，より一層教育・保育課程論への理解を深めることができるように，授業での指導方法を考えていきたい．そのことが結果的には，保育実習に必要な知識を求めようとする姿勢につながり，保育者になろうとする思いを支えていくものと考える．

2. 教育・保育課程論について

2-1. 学生による教育・保育課程論のイメージ

教育・保育課程論は，保育の基本について広く学ぶ授業として位置付けている．保育士養成校として，保育所，幼稚園，施設等に就職することを念頭に保育についての学びを深め，実習にも役立つよう授業を進めている．しかし保育者を目指す学生とは言え，教育・保育課程論というネーミングは難しく受け止められている．高校の保育系の学科から進学した学生もかなりいるが，実際に教育課程や保育課程を目にしたことのある学生は，この授業開始時には数少ない．さらに授業のイメージを尋ねると教科名を聞いただけで「難しそう」という感想がほとんどである．授業開始時であるにもかかわらず「やる気がそがれる」「もう終わった～」という表現で抵抗を示す学生も数名いた．

この授業では，保育の基本として教育課程や保育課程が大切なものであるかを理解させる以前に，いかに保育現場や実習に対して役に立つ内容であるかを実感させ，目的意識を持って主体的に授業に出席させるかということを一番に考え指導を行った．

2-2. シラバスに示す授業内容

一人一人の育ちを保障する保育とは何かを学び，保育における計画の必要性について理解する．さらに，教育および保育課程の意義とその編成方法について，実践を想定した指導計画の作成を通して，その基本を理解することを到達目標としている．

以下のような内容で授業を進めている．

・乳幼児の生活を充実させ，発達を促すための保育やその基本となる教育課程や保育課程とはどのようなものかを学ぶ．

・15 回の授業構成として，保育の基本から始まり，幼児教育の変遷に伴う教育・保育課程の意義や歴史，最後に見直しとして評価と改善までである．

具体的な方法として

・指導計画作成について，理解と実践の面からアプローチしていく．

・幼児の発達段階に応じた指導計画の実際については，演習やグループワークを組み込んでいる．

2-3. 教育・保育課程論の取り組みの難しさ

（1）授業の時期

一年生の後期（９月～２月）の授業である．９月に５日間,付属幼稚園において初めての実習（観察実習）を済ませた学生が対象である．

（2）教育・保育課程論に対する学生の意識

授業の終わりに教育課程及び保育課程に対する思いを学生に記述してもらった．そのことから推察される実状は以下の通りである．

・付属幼稚園の実習では，観察実習が主であるが部分実習を行う機会もあるため指導案を作成している．しかし単発的な遊びを取り上げた学生が多く，ほとんどの学生は教育課程との関連を考えていない．指導案を書く時に教育要領はもちろん教育課程や指導計画を参考にしたという答えは，皆無に近い．

・実習の振り返りでは，「指導計画とのつながりが分からない」とか,「指導案の書き方が難しかった」「記録が書けない」という声がたくさん聞かれた．はっきり「子どもと遊ぶことは楽しいが，教育課程など難しいものを見ながら，指導案を書くことは嫌だ」と言う学生が少なくない．

・様々な教育課程（保育課程）について授業で講義するが，教育要領（保育指針）から長期・短期の教育課程（保育課程）がつながっているという流れがなかなか理解できていない．さらに，園の教育方針によっても教育課程が異なってくるという現状に大変さを示している．

・２年生の実習状況についてもほとんど同様であり，実習園で指導計画を見せてもらったとか，指導案を立てる参考にしたという学生はわずかだった．これについては各園の実情にもよるが，実習生を受け入れる現場でも，教育課程や保育課程の重要性を感じていない園があるということも課題である．

2-3. 授業の改善に向けて

保育現場をあまり知らない学生に，教育・保育課程論を講義しても，保育の基本だという重要性や位置付けが理解できるだろうか？実習に行った時に役に立つ知識として身に付いているだろうか？はっきり言って総論的な内容であるこの授業は，学生にとってはとっつきにくくおもしろいものではないだろう．筆者も学生時代に学んで，保育との関連性を見い出せなかった思いが強い．本当に教育・保育課程の大切さを実感したのは，保育現場で試行錯誤をしながら保育実践をしてからである．そこで，授業内容が机上の空論とならないように指導方法を工夫する必要がある．つまり，学生にとって主体的に学びを深めさせる内容であり，保育の基本を身に付けたり，重要性に気付いたりさせることが大切である．

学生の最終目標は，保育者になることである．保育者の資質として，時代や社会の流れに対応でき，様々な出来事に対して問題解決する力が求められる．ただ子どもが好きというだけでは通用しない．保護者や職場内でのコミュニケーション能力や協同性も必要となってくる．これらの能力は素質も必要だが，様々な体験を通した日々の積み重ねで豊かなものになると言えるだろう．そこで授業も一方的に知識を伝授するばかりではなく，将来の保育者としての学生に対して人間的な資質を高めるような方法が必要だと考える．

3. 指導方法の工夫について

興味・関心をもって授業に臨み，授業内容を深く自分のものとして身に付けていくかを指導の目標にした．そのためには，いかに実習や自分の幼児期体験とかみ合わせていくかがポイントであり，それにつながる保育内容や遊びの要素が教育・保育課程に対しての理解

を深めていくことになると思う．幼児教育の現場をイメージすることが難しい学生に対して，一方的な知識の伝授では何も残らず退屈に過ぎないということを念頭に置き，授業を行った．

指導方法の工夫にあたり，以下のことを踏まえより深みのある授業を目指した．

3-1. 能動的学習

これについては，本学のシラバスにもアクティブ・ラーニングとして明記することが求められている．大学に限ったことではなく，能動的に学習に参加し，受動的学習から能動的学びへの質的転換を図る方策は，これからの授業の効果的な方法として推奨されてきている．(2012．中教審）これは将来,保育者としてやっていくために,主体的に活動したり,自分の思いを様々な方法で表現したり，仲間と協力しながら課題を解決していくというような保育者に必要な力を付けるためにも有効な方法である．

教育・保育課程論の授業の中では教科書を使用するが，時間内に重点を教授するためにはポイントをレジュメで示すようにしている．その中に必ず学生が能動的に参加できるような箇所を入れるようにした．例えば５領域に関心をもたせるためには，内容を伝えるだけでなく，考えを広げていくレジュメ構成にして考えさせるようにした．また，幼児の問題行動に対する保育者の配慮すべき点を考えるという場面では，一人で考えるだけでなく小集団で意見交換することで理解を深めていくようにしている．

3-2. 他の教科との関連

他の教科内容とのリンクを考えた授業構成である．特に保育内容に関する領域は，教育課程・保育課程とは切り離すことができない．他の授業で習ったことが，教育課程・保育課程の中でどのように位置付けされているかを知ることで，互いの授業は生きたものになるだろう．

教える側の立場としても，できる限り他の教科で学生がどのような事を学んでいるか知るように努めている．時には一緒に受講し，学生の目線で考えて授業を進めている．そのため「～先生の授業でも同じ内容があった．それほど大切な箇所なんだ」「前の授業から続いて，関連付けて教育・保育課程論について考えられるので，すっと授業の内容が頭に入ってきた．内容がつながっていることが理解できた」という学生の感想を共感的に受け止めることができ，学びを深めることになっていると感じた．

3-3. 実習をふまえて

養成校の学生が一番主体的に学ぶ場は，実習だろう．対象の１年生は５日間の観察実習後の授業であるが，再履修の２年生の振り返りに「子どもの姿を読み取るという領域で･･･自分が考えていた事や話し合って出てきた考察は，実習の経験が活かせていると感じた．１年の時に聞いた話でも，実習をして本物の子どもの姿を見た後では，この授業は別の見方や聞き方ができた」とある．いかに保育現場をイメージしながら授業に参加することが，教育・保育課程への興味・関心を高め，主体的に授業に取り組むことにつながっているかが推測できる．

4. 実践

３にあげたような視点で改善を行ってきた．以下に，具体的な実践の事例を学生の振り返りのコメントを含めて紹介する．

4-1. 授業ごとに振り返りを行う

毎回授業の終わりに，振り返り（感想，質問など）を記述させた．そのことで授業内容に対する学生の理解度が確認できた．さらに，学生の疑問には必ず全員の前で返答するようにした．このことにより，受動的参加であったり疑問を持たない学生にも気付きの目を育てることになったと思う．

毎回，授業の最後に質問や感想を書く時間があり，他の人の質問を聞くことで，自分が気付かなかったことが分かり，それをみんなで共有できた．
Ｑ＆Ａにも，きちんと答えてもらいました．友達の質問であっても，他の人はこんなことに気付いていたのかと発見でした．いい勉強になりました．
15 回の授業，毎回振り返りを書くことで，書く力がついたような気がします．考えをまとめて書くことは，保育の記録を書く訓練になると思う．

4-2. 偶然性を生かす（内容との関連づけ）

窓の外に付属幼稚園の子どもたちがわんぱく祭りのリズムの練習をしている姿が見える．授業で部屋に入る前に，学生たちは気付いていたはずである．ちょう

どこの日の授業内容は，指導計画の構成（保育内容をとらえる視点として５領域との関連，環境などのとらえ方）であったため，付属幼稚園の子どもたちの様子をまず観察するように声をかけ，活動に照らし合わせながら５領域についての説明を行った．

講義前に見たわんぱく祭りの練習では，かわいいなぁとしか思っておらず，なんで見るんだろうと不思議でした．しかし，先生のプリントを読んだり聞いたりすると確かにあの活動には５領域の要素が入っているんだと理解できました．一つの活動には５領域の中の一つだけが入っているんだと思い込んでいたのですが，バランスよくすべて入っていると発見でした．
５領域を実際に自分の目で見て，学ぶことができて勉強になりました．考える時にイメージが高まってきます．
正直，練習の姿は見てかわいい，楽しそうとしか思いませんでした．しかし，先生の説明で本当に５領域が全部ある！とびっくりして，なんだか分かったことがうれしかったです．
日頃から子どもたちの観察をするときには，５領域を意識しながら見ていくことが大切だと思いました．
教育の中で，５領域は深く結び付いていることが今日の講義で改めて分かりました．これから実習に行くと，見つけるだけでなく遊びを作っていく立場になるので，どう５領域が成り立っているかしっかり観察して学んでいきたい．
この講義を受ける前に窓の外を見て，子どもたちが踊っているのを「かわいい～」で終わっていたけれど，５領域に注目してもう一度見るとたくさんのことが発見できました．視点を変えてみると，こんなにも感じるものがあるのだなと思いました．
日々の生活の中は，５領域に関係していることだらけだと思いました．その場面場面での関連については，幼稚園教育要領や教育課程をしっかり理解しなくてはならないと改めて感じました．
子どもを観察する時に，普段５領域を気にせず，ただ見ていただけだったから，今日は先生から質問されてすぐに答えることができませんでした．自分が思っているより５領域を理解できていないと反省しました．
前期の授業で５領域については習ったけれど，忘れてしまっていました．今日，実際に見て勉強できました．実際に見て勉強するほうが，教科書に書いている内容も頭に入りやすいのかなと思いました．

4-3. 授業の内容を体験する

理論が頭に入ってこないのは，内容がイメージできないからだと思い，適宜授業の中に遊びの要素を取り入れ，実際に体験させることにした．実習を控えた学生にとっては，教材研究も喫緊の課題である．90 分の授業で集中力が途切れそうになった時に簡単な遊びを行い，理論と結び付けていったが，特に絵本や手遊びは学生にも好評だった．もちろん教育・保育課程論では，教材研究を行うことが目的ではない．しかし発達段階を考えた遊びや季節にあった遊びは，指導計画をとらえる上で実際に体験してみることが一番理解しやすい．子どもの気持ちや保育者の立場を考えながら授業を進めることは，保育者になることへの思いを高めることになったのではないだろうか．

実際に鬼ごっこをしてみることで，少しずつイメージが膨らみ，保育者の援助しなければならないことが見えてきた．
教室内での鬼ごっこなどはじめは乗り気ではなかったのに，あとからだんだん楽しんでいる自分がいることに気が付き，楽しくなった．
子どもの気持ちになって実際に遊んでみることで，教師の援助が思いつきやすいと感じました．
保育者も一緒に楽しむことで，子どもたちが盛り上がるきっかけになると感じました．
授業で遊びを取り入れることは実践的であり，今学ぼうとしている保育の要素がたくさん詰まっていて，すっと授業の内容が頭に入ってきた．
教科書ばかり見る授業だと思っていたが，手遊びや絵本を見ながら保育との関連を勉強でき，飽きることのない楽しい授業だった．
保育の基本をペープサートを使って覚えたが，みんなで繰り返し言う事は，とても楽しかった．

5. 結果と考察

15 回の授業終了後に，以下の４つの質問事項に答えるという方法で，学生自身の授業参加度・授業内容の理解度を振り返らせた．これは，授業者への評価を問う意味もある．

① 授業に対しての理解度や達成度および参加度の総合点を５点満点で表現
② 分かりやすかったところ

③　理解が難しかったところ
④　質問や感想など

①の回答について

・概ね授業に対しての充実感が得られているだろうとする５点・４点は，34 名いた．
・中間の３点は，18 名である．
・課題となる２点と記述した学生は，１名である．

この２点と回答した学生は，理解力について問題があった．感想の中に「手遊びや先生の経験談を聞くのは楽しかったが，内容を考えると他の授業と内容が似ていて混乱パニックです.」と記述している．

②の回答について

以下のような回答が多い．

先生が経験談と照らし合わせて，内容一つ一つの説明をしてくれたことで理解しやすくなった．
遊びについての話だけではなく，実際にやってみたりしたことで分かりやすかった．
保育現場での現状を話してくれたことは，リアルでイメージしやすかった．
実際に演出してくれた（手遊び，絵本，あやとり，紙芝居などの遊び）ことで保育内容についての興味が高まった．

やはり学生にとっては，保育現場を知ることへの関心が高く，授業の中に取り入れることが，理解を深めることに有効だと言える．

③の回答について

授業に主体的に取り組ませることの裏返しとなるが，興味・関心のないものは難しいと捉えている．さらに保育現場の経験が少ないため，直接保育に関連する指導案などは難しいと答えている．この内容については，教育・保育課程論の授業では習得は無理である．

自分が関わっていない幼児教育の歴史
指導計画や指導案の書き方
保育内容が幅広すぎる

④の回答について

４の実践の振り返りのところで述べたような学生の感想が多く見られる．実習を目の前にした学生にとっては，総論という授業であっても，実践的なものに対しての関心が高いことが分かった．

以上の振り返りからでも，理論を理解するためには体験的学習に基づくことが大切であることに気付く．特に，“遊び”を知らない学生が多いという実態を踏まえて，時間はかかるが学生の興味・関心のある内容から，まずは主体的に取り組もうとする気持ちを引き出すような工夫を行い，さらに積み重ねていくことが必要だろう．また，保育現場や他教科（保育内容）・他教員との連携を行っていくこと，そのためには十分な準備が不可欠であることを痛感する．

6. おわりに

学生が主体的に学習するためには，伝統的な情報伝授スタイルの講義には限界がある．多様な学生のニーズに応えるためにはどうするか．それが能動的な学習方法の工夫だと思うのだが，ある程度一人一人の課題に対する理解力と表現力が育っていなければ深まりのある学習にはならない．この授業でもグループワークを行ったり，質問を全体で共有したりした．その際，学生は「一人では気付かなかった．友達の意見が参考になった.」と記述するものは多かった．しかし自分の考えをいかに他者に分かりやすく表現するか，その大切さに気付くものは少なかった．これは，今後の課題である．

さらに学生の振り返りは，筆者の授業に対する評価でもある．筆者，自分自身の資質向上の機会だと捉え，学生とともに授業づくりをすることで，より一層分かりやすく主体的に学生が学ぼうとする授業への改善を行っていきたい．

齋藤は『新しい学力』(2016) の中で，「学問する上でそれぞれの学問を学び，その学問を心から素晴らしいと思ったのでなければ，学習者の意欲に火をつけることは難しい．学問ははじめから面白いとは限らず，地道でつまらないとも思える勉強を経て，学問が分かるようになり，そして自在に応用できるようになってはじめてそのすごさ，面白さが分かってくるものである．教師は，その面白さがわかるようにするために，粘り強く自らが情熱をもって教えなければならない.」pp.164-165[1] と記述している．

保育の道に入ったばかりの学生にとっては，教育・保育課程というものは，とらえどころのないものであ

り，授業の取り組みにも壁を感じることがあったかもしれない．幸いなことに，現場経験のある筆者が語る内容（保育現場の苦労や喜びなど）には，目をきらきら輝かせて授業に参加してくれ，最終的には保育者になることへの夢や実習に対しての意気込みを語ってくれた．

教師が自分の思いを語り，授業をしていく事で，教育・保育課程論の目標は達成できるのではないだろうか．教師の情熱こそが学生の主体性を呼び覚まし，これからの多文化保育に携わる保育者を育てることになると確信している．

7. 引用・参考文献

１）齋藤孝著：新しい学力　岩波新書　2016
２）上田敏丈・平野仁美・羽根由美子・橋村晴美・松葉百香・二橋香代子・半澤幸恵・浦浜麗名：大学間授業研究の有効性に関する研究－保育者養成校教員の指導方法の差異に着目して－名古屋市立大学大学院人間文化研究科「人間文化研究」，2016
３）酒井幸子：養成校における授業改善の取組－体験学習を取り入れる－，保育学研究，第 52 巻第３号，pp.145-148，2014